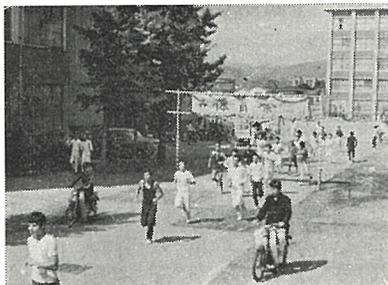


# 商業高校

— 創立 20 周年 —



商業高校体育祭の風景

イエスのみことばのなかに、「神の国を何に比べようか。また、どんな譬たとえで言いあらわそうか。それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる」(マルコによる福音書第四章第三〇節—三二節)とある。生徒たちは、このたとえにあるような一粒のからし種といえるであろう。かれらが同志社で受けた教育は、やがて芽を出し、

## 地にまかれた種

同志社商業高等学校は一九四八(昭和二十三)年四月に、男女共学・商業課程の定時制高等学校として新設された。今年で満二十年をむかえ、恒例の商高祭(十月一日—六日)の第二日目には、創立二十周年記念行事が行なわれた。この機会に現校長藤代泰三氏に「商業高校創立満二十年を迎えて」という一文、卒業生三氏には「商高時代」についての感想をそれぞれ書いていただき、創立二十年のささやかな記念とした。

## 藤代泰三

のびのびと成長し、その木かげに多くの鳥が宿りうるようにと祈りたい。このことは何も、かれらが将来社会的地位をえるとか、大きな実績をあげることばかりを意味しない。その職場や立場で、同志社で受けた教育を十分に生かし、人々に奉仕し、喜ばれるものとなっていただければと願うのである。

わたしは同志社商業高等学校の生徒たちと接触していて、そのことばのふしふしや、そのおこないのはしはしに、やがて実を結ぶであろう種を見ては、はげまされるのである。

この学校は、ことしの四月で創立満二十年の記念すべき年を迎えたが、これを記念する先日の体育祭のとき、マラソンに出場した女生徒の一人が、横腹のいたみをこらえつつ歩一歩と前進し、かなり上位でゴールにはいるなり倒れてしまったが、わたしは胸の熱くなるのをどうすることもできなかった。リレーに出場した男生徒が競技のあと貧血を起して倒れたが、トラックを疾走していたときのかれの姿は、わたしのまぶたにやきついている。図書室で男生徒がわたしのそばによってきて、わたしはルソーの「エミール」を三度読んだとて、赤や黒の鉛筆でぬりつぶされた書物を見せ、読後感を語ってくれた。それは図書室から借り出された本であったが、だれも読まずに書だなにかざっておくよりは、手ずれるまで読まれる方がずっと望ましいとわたしは思った。ことしの春、女生徒の一人がつづった母に関する文章が礼拝のプログラムを記したものに掲載された。この生徒は時々母の白髪をぬいてやるのだが、そのたびに心の中で母と彼女が歩いてきた過去を思い出してみるといのである。その時幸福感にひたり、母に長生きしてほしいと心の内でくり返

すという。ここにわたしは、物質的には豊かでもなくとも、この生徒とその母の間に深い共感の場が存在することを知り、教えられるとともに、ここにも生徒の現実の歩みを見るのである。

しかしこのようにいくつかの例をあげたが、この学校の生徒の補導に全く何の問題もないというのではなく、わたしたちはいろいろの困難な問題ととり組んでいる。在校生の約八〇パーセントは勤労青少年であるから、かれらは昼間、実社会のなまなましい現実にふれているのである。激動をつづける実業界のただなかにおける働らき、社会のあらゆる面における人間不在からくる矛盾との格闘、政治への不信と国際関係の不安定からくる焦燥感はいずれの上におおいかぶさってくる。それだけにかれらは人間的に成長する機会にもめぐまれてはいるのだが、しかし精神的知育的に未熟な年齢であるからそれだけに苦悩する方が多いであろう。今日青少年の問題はとくに重大なことがらとされているが、ことに本校生徒らへの補導は並大抵なことではな

い。  
この学校は、わが国に大幅な学制改革が実

施された昭和二十三年に、経済的に恵まれぬ階層の勤労青少年に、同志社教育の門戸を広く解放するために設立された。今日といえども全生徒の生活の実態と家庭環境から考えて、この目的は達成されつつあるといえるであろう。しかしこの学校の性格から考えて、多額の学費を徴収することは不可能である。

したがって物価指数の高騰にもとづく収支不足金の年ごとの累積は、わたしたち教職員の間から離れぬことである。この問題は、わたしたち教職員に精神的重圧となつてのしかかってくるけれども、わたしたちはそれにもめげずにはげんでいきたいと思つている。この問題は従来いろいろな角度から検討され、考えられてきたが、まだ全く解決の糸口が見あたらない。輝かしい同志社創立百年を迎えるまでに、この学校がどのような歩み続けるか、このことは同志社教育自体の意義を、それぞれ自問自答することを意味することでもあろう。

おわりに、本部関係者、大学関係者ならびに本学教職員と卒業生の方々に、創立以来のご尽力とご援助に対して、心からお礼を申し上げたい。  
(商高校長、神学部教授)

# 夜学生四年間の苦闘

飯田修三

それは昭和二十三年のこと、母校創設のお

り、わたくしは入学を許された。第一回生およそ百五十名ばかりで、ごく小ぢんまりした寺小屋風の学校でした。それらしい四ヶ年の間、ひるは証券会社でアルバイトしながらの通学「苦しくなかった」といえばうそになる日々の生活が続いた。しかし労学同婦の実践は、わたくしたちにたくさんの尊い経験をさせてくれた、と今にしてふかく感謝している。働きながら学ぶ者同志のいたわりあい、はげましあいと共に向学心をかきたてた。卒業してから十五年、わたくしは一介の教員である現在だが、夜学生四ヶ年の苦闘を思い出し、毎日の研究生活のはげみにしている。

過日、わたくしは第一回生は懐旧談のひとつくさりも……と三十名ほど集った。お前とおれで話題にこと欠かなかったが、思い出話として座をにぎわしたものの、ひとつふたつを拾ってみよう。

まず第一に母校は夜学であったのに、当時の電力事情の劣悪のためにしばしば停電をくらい、面くらったことが再々であった。夜まで電灯ともらさずではかたなしである。「ローソク授業はひどかったなあ」と口々にのぼった。あるおどけた友人は「同志社らしくキャンドル・サービスでよろしい」とみんなを笑わせたりした。冬の夜など冷えてきて、びろろな話だが、その夜陰に乗じてひそかに小便をたしに教室を出る芸当をした者もあったろう。今から思えばうそのようなことである。

つぎに話の種になったのは、(話の種とは失礼)先生方のこと。なにしろ新設校のこと、専任の先生方もまったく小人数である。同志社大学の商学部・文学部・神学部の諸先生も、教べんをとる助勢をしてくださった。岡本春三校長先生以下、思いだすままあげさ

せてもらう。秋山哲治先生には「マイ・ヤンガー・デイズ」の講読で、ひんぱんに英単語の書取りをやらされたとか、米人のマクナイト先生の英会話には閉口したとか、西村民之助先生・川合安雄先生には高校生としては難解な簿記問題でしぼられたとか、平山玄先生の経済では、ずいぶん笑声をわかせた楽しさを味わったとか、三木良一先生の数学講義はスピード・アップでアプアプしたとか、中村三郎先生の英語は非常に辛かったとか、波多野政雄先生の宗教の時間は迫力?があるとか等々、口さがない者どもの昔話はつきなかつた。諸先生方、またお許しを乞う。

年一回の同窓会の総会に出てみると、わたくしども第一回生の連中の頭はうすくなり、あるいは白もまざりはじめている。なるほど学校出てから十五年、それもむりからぬところ。同窓会で後輩はもちろんいたわってくれてであろうが、同期生は同期生でまたなぐさめあおうではないか。

(昭27商高卒・竜谷大学助教授)

## 神の摂理を思う

林 比佐雄

わたしは昭和二十五年に商高に入学した。そして商高で救われた。もし商高がなかったならば、おそらく今ごろは警察のご厄介になっていたことであろう。というのは、この学校に入るまでは非行少年として何度も補導されていたからである。父を終戦後、間なしになくした。その時、中学二年であったわたしはうるさい存在がなくなつたことをいいことにして不良グループの仲間入りをしたのである。したがって卒業した時には欠損家庭の非行少年なんかとても雇ってくれなかった。といって進学なんかとても経済が許さない。母と祖母と二人の弟（当時、小学五年と五歳）の五人家族。母の収入でやっと中学が卒業できた状態。それでいろんな内職とした。そして一年目にと近所のチップケな瓦屋に就職させてもらった。昭和二十二、三年頃といえば非常な就職難の時代であった。こんな小会社にまで一流の昼高校卒が次々と入社してき

た。その彼らによって学歴のない貧乏人と馬鹿にされたのである。それだけでなくある事ない事、上役に告口されて首にされたのである。その時、わたしはひそかに商高に入学していたのである。それは何が何でも勉強だけはしておかなくてはならないと彼らに思い知らされたからである。そして九月のある夜、ふと自分の今の生活を考えるとはなしに考えたのである。俺も母も必死で働いている。だのに暮しいつこうに楽にならないばかりか、おまんまにもまともになりつけない有り様である。だに祇園町には昼間から高級車がズラット並び、たらふくご馳走を食って遊んでいる連中もいる。当時流行語になった「社用族」である。こんな世の中でわたしは一体、何のために苦勞して生きているのだろうか。こんな世で苦勞して生きるかがあるのだろうか。また同僚に裏切られ、踏み台にされ、自己の出世しか考えないような人間の

生きている世、誰も信ずることのできない人間社会、こんな世に何も苦しい思いをして生きる理由はないのではあるまいか。こんな世にもはや何の未練もない。このような考えを起したのは、今から思うに商高の教育がそうさせたのであろう。それでわたしは、その苦痛から逃れるために自殺を考えたのである。その夜、直ちに実行に移ったのである。東海道線の線路上に立ったとき、京都駅の方からボーッと汽笛の音がきこえてきた。その時、母や弟の顔が走馬灯のように瞬に浮かんできたのである。わたしは今、死ねば楽になるだろう、が残った家族の者は一体どうなるのだろうか。そしてまた、この広い世界に何億という人が生きて働いている。人類の歴史が始って以来、数え切れない人が生きたきたのである。きっと誰か一人ぐらい生きる意味を書き残しているのではないだろうか。一度調べてみよう。それから死んでもおそくはあるまいと思ひ直して、またノコノコと線路からはい上って、帰宅したのである。それからというものは、寝食を忘れてといえはきこえがいいが、実は食事する金にも窮していたのである。岡崎の図書館へ日参したのである。能

無しの悲しさで、いくら本を読んでも生きる意味をつかみとることができなかった。それで先生方に質問して廻ったのである。「先生は昼間働いて夜まで稼いでおられるのですが何のためにそんなに働かれるのですか」と。

先生方からも納得ゆく答えを得ることはできなかった。その時、英語の教師であった中村先生が牧師であると知って、教会へ追いかけて行った。すると先生はわたしを直ぐに礼拝堂につれて行き、聖書を読み、祈り始められた。おどろいた。それはわたしのために一心に祈っておられるからである。祈りというのは自分のためにするもの、自分の願ひ事だけを捧げるものと思ひ込んでいたからである。それから聖書の箇所は忘れもしませんガラテヤ人への手紙一章十一節―十七節であった。そしてただ一言「教会に來なさい。そうしたらわかる」と。それからわたしの教会通いが始まったのである。教会の集会なら何でも出席した。また牧師の蔵書も片々端から読みあさった。そして三、四月たったころ、ルターの「ガラテヤ書講解」を読んでいたとき開眼したのである。「母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしを

お召しになった。」けれど、生きる意味は！わたしのような何の取得もない、厄介者でもわたしは母の胎内に宿ったときから、すでに神は聖別し、み恵みをもって、わたしでなければならぬ能力を与えてくださった、お召しになっている。さらに、この広大な世界に私という人間は、今ここにしかないのである。この長い人類の史上、私は今ここにしか存在しないのである、いかなる価値ある物ともってしても引換えることのできない、また誰も私を生かせることができないのである。神はわたしにだけできる使命を与えてこの世に生を与えられたのである。わたしはこの世に生きる何の意味もない思っていたが、そうではなかったのである。このような無能無価値なわたしにもタラントを与え、それを神の御用のために用いよと召してくださいである。それを知らされたときの喜びは言語で表現できないほどのものであった。そして祈りに祈った。わたししかできない。わたしがなさねばならない。わたしだけが与えられているタラントとは何であろうかと。それをなすことが、すなわち生きる意味ではあるまいかと。当時、学科で一番得意なのは数学で

あった。したがって数学を要する分野に進むことがわたしに与えられた使命ではなからうかと。それから、その方面に進学するため受験勉強にとりかかった。当時、公立大学に進学するには全国一斉の「進適」を受け、全国平均点以上を取らなければ受験資格がないのである。したがって大学進学希望者のほとんど全員が「進適」模擬試験を受けていた。わたしはその受験料もなかったので一度も受けなかった。だからだけでもないでしょうが「進適」は見事に落第したのである。全国平均三二・七点だったと思うが、わたしは何と五点しかなかったのである。しかるに同志社での「進適」は神学部で最高点であったということであった（これは面接試験のとき大下神学部長から知らされたからたしかである）。不思議なこともあればあるもの。わたしは祈りに祈って数学で身をたてることこそ神への使命と判断したのにもかかわらず、その進路は閉ざされ、伝道者としての道が大きく開かれたのである。

最後に、このような光榮ある仕事へと導びかれたのには諸先生のあたたかい教授と忍耐あるご指導があったればこそであった。そ

れに素晴らしい級友にめぐまれたことである。商高はわたしにとって憩いと喜びと希望を与えてくれる場であった。したがって会社を休んでも学校は、四年間、一日も休まなかつた。

## 聚芳館の思い出

た。金銭で得られぬ良師・良友に恵まれたことも神の導きと深く感謝している次第である。

(昭35大神院・批批島教会牧師)

## 長谷川洋右

最近、高校生政治活動参加の是非が論じられているようですが、思えば小生が商業高校三年生の時、例の日米安全保障条約をめぐっての全国的な戦いに遭遇し、われわれ商高生もまたそれに参加したのです。正確には商高生の一部というべきかもしれませんが、この問題は生徒大会でも取りあげられましたが、授業にも多大の影響を及ぼしたし、この闘争に積極的に参加することを希望する生徒と学校側とがかなり摩擦したことも確かです。当時、高校生政治活動参加の是非などということはまるで問題にもなりません。学校側においてはいざ知らず、われわれ生徒側においては全くそうでした。また世論的にもそういうことが問題にされた気配は

ありません。実際、次元はもはやそういうところを通りこして、或はそういうことは意識にも上らないし迫られた状況だったと、いま反省して思われます。うまい表現ではないかもしれませんが、「衣食たりて礼節を知る」——こんな季節が今はやってきているのでしょうか。

しかし、実際衣食はたりているのでしょうか。商業高校の校舎も見違えるばかり立派になりました(たとえ大学からの借り物とはいえ)。小生の頃は今は大学の体育課が使っている聚芳館がその主要校舎でした。見ればわかるとおり。これが同志社の建物かと思われほどの古くさく暗い、貧弱な陳腐な建物です。東隣の堂々たる明徳館がどんなにうら

やましかったことか。けれども、聚芳館の貧弱さ、陳腐さが小生などにはかえって心安まるのでした。現在の新町校舎は確かに明るく素晴らしいのですが、ですから小生などには何かしらよそよそさが先に立って、やや大げさにいえば空漠たる感さえします。そして、生徒たちも確実にそれにマッチしている。驚くほどそうです。小生の頃の商高生たちもまたそうでした。今思えば驚くほどあの陳腐な聚芳館にびったりの商高生たちでした。あの通りに暗くて陳腐で貧弱な生徒たちばかりでした。だからあんな病にもすぐに感染されてしまったのでしょうか。それは長屋の喧嘩に行かずにはいられない長屋住居の者の心理と同じ心理だったと思われれます。今は団地族の心理ともいうのでしょうか。コンクリート壁一つ向こうは彼岸であり、別世界です。そのくせ巨大なマスコミュニケーションだけの共通世界はある。当然です。この今日の現実を前に、そのよそよそしくささうたる足よりは当然でしょう。しかしあの時点が確実に刻印されてしまっているわれわれの足りがきこちなく重いのもまた当然といわなければならぬでしょう。(商高講師)